

令和2年度北海道教育大学釧路校

教 員 養 成 課 程

社 会 人 入 試 小 論 文 問 題

## 注 意 事 項

1. 問題冊子1冊、小論文解答用紙1枚、下書き用紙1枚。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
3. 小論文解答用紙の指定欄に、受験番号を記入しなさい。
4. 解答は、解答用紙に横書きで、問に指定された文字数の範囲で記入しなさい。

(ただし、段落、改行によってできた空白マスは解答の文字数に含むものとします。)

## 問題

以下の文章を読み、問いに答えなさい。

### 「自分は何も知らない」と思うこと

こうしていろいろなことを知るたびに、私が一番思うのは「ああ、自分はなんてものも知らないんだろう」ということです。「無知の知」という言葉があります。自分は何も知らないのだということに気づく。これが、実はとても大切なことなのではないかと思うんです。

勉強していなければ自分がものを知らないことに気づかない。だから勉強する気になれない。けれど、ちょっとでも勉強してみると、学問というのはほんとうに奥が深いことがわかる。「じゃあ、もっと知ろう」という意欲が出てくるわけですね。

私も中学生や高校生の頃は「なんで勉強をしなければならぬんだろう」と悩んだことがあります。ところが、気象庁を担当していて地震について取材すると、マグニチュードが7から8に上がるとエネルギーが32倍になるというのです。目盛りが1つ上がるだけでなぜ32倍になるのでしょうか？これは対数なんだよね。「そうか、対数はこういうときに使うのか。なぜ数学の先生はこのことを教えてくれなかったのかな」と思ったりするんです。

中学生で因数分解を習いますね。これもなぜやるのかよくわからなかった。ところがあるとき、「物事を整理してわかりやすく伝えるのは、因数分解そのものなんだな」と気がついたんですね。因数分解は数列や数式のなかで共通したものを見つけて一度外に出し、それ以外のものを括弧で括弧することです。これはある複雑な物事や事象を人々にわかりやすく説明するときと同じです。いろいろな要素のなかから共通したものを見つけて、それを最初に出して説明しようとする。まるで同じなのです。

つまり、因数分解を習ったことによって、自然と頭のなかで物事を整理して、わかりやすく説明する力が備わったのだと思ったのです。ビートたけしさんも「何かを表現するとき、必要なのは因数分解の力だ」と言っていました。彼もそこに行きついたんですね。

### 生涯学び続ける力をつけよう

今、毎日勉強するなかで「いったいどんな意味があるのだろうか」と疑問に思っているかもしれません。しかし、それはやがて自分の成長に大きくつながるのです。

先日、アメリカのマサチューセッツ工科大学(MIT)を視察しました。さぞ最先端の技術や知識を教えているのだろうと思っていましたが、意外なことに音楽教室にはピアノがズラッと並んでいて、一般教養も熱心に教えていました。私はびっくりして「どうしてで

すか？」と尋ねました。

すると、最先端の技術や知識も教えているけれど、今の世の中のスピードでは4年も経つとそれらは古くなってしまふ。だからその時点の技術や知識ではなく、大学を卒業したあとに自ら新しい知識を吸収したり、自分で最先端の技術をつくり出そうとしたりする能力こそ身につけさせるべきだと考えているというのです。「すぐ役に立つことは、すぐに役に立たなくなる」そう考えているのです。

慶應義塾大学の塾長だった小泉信三も同じことを言っています。すぐに役に立たないようなことが後になってじわじわと役に立つということですね。世の中のさまざまな人たちの経験に裏付けられて中学校や高校のカリキュラムはつくられています。そのときはわからなくても、後になると役に立つことはいくらかもあるんですね。

とはいえ、中学・高校や大学で学べることはやはり限られます。すべてを学ぶことはできません。とすれば、身につけるべきは、社会に出ても生涯にわたって学び続けることができる力だろうと私は思うんですね。

私の父親は88歳、つまり米寿を過ぎて急に体が弱ってしまつて寝たきりの生活になりました。ところがある日、新聞広告を見ていた父は『広辞苑』の第四版が出たらしいから買ってきてくれ」と私に言うのです。『広辞苑』はとても分厚い国語辞典ですね。「寝たきりなのにどうするんだろう？」と思いましたが、たまには親孝行をしようと買い求めて父に渡しました。

すると、重たい辞書を枕元に置いて、読み始めるんです。私は「なんという知識欲だろう！」とたまげましたね。88歳を過ぎて寝たきりになつてもなお『広辞苑』を読み続ける。なんという好奇心、向学心だろうと頭が下がる思いでした。

それから間もなく父は亡くなりました。いま『広辞苑』は第七版が出ていますが、私にとって『広辞苑』第四版が宝物です。

父は何歳になろうとも学ぶことを忘れなかった。学び続ければ人間はいくつになつても成長することができるんです。学び始めることに遅いということはありません。

皆さんは、勉強しようと思えばできる環境にあります。しかし、世界には勉強したくてもできない子どもが大勢います。あるいは「勉強がしたい」と言ったがために武装勢力に狙われ、銃撃されて死にそうになったパキスタンのマララ・ユスフザイさんという少女もいます。ちょうど君たちと同じくらいの年齢ですよ。

勉強しようとするや殺されてしまうような社会もあるなかで、君たちは勉強しようと思えばいくらかでもできる。こんなに幸せなことはないんですね。学ぶことの楽しさを見つけてもらえればいいな、と思っています。

(桐光学園+ちくまプリマー新書編集部編 『学ぶということ <続・中学生からの大学講義> 1』 ちくまプリマー新書 305, 筑摩書房, 2018年8月から一部抜粋・改変の上引用)

問 1.

筆者の考えを踏まえた上で「学ぶということ」の意義について教育に関連付けながら、あなたの考えを 800 字以上 1000 字以内で論述しなさい。(200 点)

(段落、改行によってできた空白マスは解答の文字数に含むものとします。)